

三 如何に稱へん彌陀の名を

信心の上は、不圖稱へた念佛も報恩にそなはるとの仰せ。すればその稱へ方に上手下手はない筈である。京都におサヨと云ふ信者があつた。妻が至つて信者であるに引きかへ、夫は至つて無法義で、妻の稱名が、合點がゆかず變でならない。或日、外から歸つて來るなり、おサヨくと呼ぶ。返事をしてもく、おサヨくで呼び續ける。まるで、おサヨ、ハイ、く、く、の連發。女房はたまりかねて「何どすいな、此人は、歸るか歸らぬに、人の名ばかり呼び續けにして、返事をして居るのが解りませぬか」。「解つてる」。「解つてるなら、呼ばぬでよいではおへんか、要事を仰しやつたら」。「腹が立つかい」。「立ちませいで……」。「そんなら、お前の常に大切にす阿彌陀様も、嘸かし腹が立つであらう」。「それはまた、何うして」。「でも毎日毎時南無阿彌陀佛くつて、呼びづめにして居るではないか」と云つたさうな。信仰のない人には、そんなに見えるでせう。

信の上の稱名には、佛徳を讚嘆する意味と、佛の化益を助成する力と、佛恩を憶念する謝意があるので、自ら報恩にそなはるのであります。従つて懈怠してはすまない。とはいへ、強ち行儀作法に依らねばならぬと云ふ譯ではない。「男女貴賤ことぐく、彌陀の名號稱するに、行住坐臥もえらばれず、時處諸縁もさはりなし」時をもいはず、處をもきらず、念佛すべしである。さてその稱へ方は？

蝮川親當、或時一休禪師に參つて、四方山の話の末、「あの念佛の申し様は和尚様どうしたらよいのでござらう。ナムアマダブツと云ひ、ナンマンダブツと云ひ、ナンマイダー、ナマイダー、ナムナムなど、色々に申しますが、別に利益にかはりばござらぬもので御座らうか、その邊のところ不審に御座

ります。」「さやうか蝮川殿」「何で御座る。」「親左衛門殿。」「何でござるな。」「

親當殿。」「何御用で御座るな。」「今年の米の出来は平年よりも宜しいかな。」「

これはしたり、先程、お尋ね申した念佛の御返事も下さらず、米の話などは

不審で御座るな。」「イヤ御返事はいたしたが、まだ御判りにならぬか。」「一

向承りませぬ。」「扱々困つたもの、先程蝮川殿と呼び、親左衛門殿、親當

殿と呼んだ時、貴殿は返事をなされたな。」「如何にも手前の名なれば、御返

事致して御座る。」「されば念佛も其の通り、何と申そうが、何れも佛の御名

なれば、利益に別は御座らぬ、親當は横手を打つて「如何にも了解して御座

る。』

織田信長に生駒萬兵衛といふ人が初めて仕へたとき、或る無遠慮な横着者

が、萬兵衛に問うて、「貴殿の御名前について、三つの不思議がござる、それ

は貴殿の御名前は、ま兵衛か、まん兵衛か、但は、まん兵衛で御座るか、こ

の邊のこと何分無案内にござるで、睨と承り度存ずる」と、笑ひもせず

尋問した。其時萬兵衛は、この横着者の問をきいて、佛然として色を變へて

憤つたかといふに、さうではない。莞爾として其の者に對して「貴殿の不審

は尤のこと々存ずる、さりながら、いか様に呼ばれても少しも苦しいはござ

らぬ。凡そ人の腹には虚實が御座る、若し腹がすいて空虚のときは、精力盡

きて撥ねて讀むべき勇氣も御座るまいから、萬兵衛と呼ぶるゝがよろしく御

座らう。大飯を食ひ酒などを痛く吞みて、腹がふくれて充實する時は、まん

兵衛とはねて讀む方がよろしく御座らう、併し拙者の本名は生駒萬兵衛と申

すので御座る」と答へたので、流石の横着者も狐鼠々と逃げ出してしまつ

た。

今我等が御念佛するには、種々な稱へ方をする。ナンマンダブツも、ナ

マングダブも、マンくさんも其の意味は、結局同一である。けれども他人がこんなぞんざいな呼方をしたならば、腹も立つであらうが、可愛い我兒が漸く母と知つて、片言交りに「かあやん」と呼んだ時は、嬉しくてたまるまい。もう一度云うてみよ。云はしておいて喜ぶは、親の慈悲。「子の母を思ふが如くにて、衆生佛を憶すれば、現前當來とほからず、如來を拜見うたがはず」あゝ私を親と知つてくれたかと、衆生がいろいろの稱へ方も、如來の親様は嬉しくて、耳傾けて聞いて下さる。